

刊行にあたって

本書は、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」による採択課題「アジアにおける薬用植物資源の広域市場流通と地域社会の資源利用の歴史的相関に関する研究」（代表：岡田雅志、2020年度）の共同研究成果の一部の成果報告である。本研究課題は、前年度の同事業採択課題「アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究：モノから見るグローバルヒストリー」に続き、アジアの薬用植物資源がいかに生産・流通・利用されてきたかについて、学際的な研究を行い地域社会と広域世界との連関を解明することを目的としたものである。

ここでいう薬用植物資源というのはいわゆる漢方薬で処方される生薬原料である（生薬自体は動物・鉱物由来など多岐にわたるが植物由来のものが大宗を占める）。自然由来の生薬は、その賦存が自然環境に規定されると同時に、消費サイドも、気候変動などの環境変化に大きく左右される。さらに、漢方薬のように特定の医療知識体系に基づいて利用され、流通する。したがって、薬用植物資源に着目することによって、関係する地域間に横たわる社会、文化、経済の諸側面や自然環境の変容など様々な要素が見えてくるのである。

2020年度は、新型コロナ禍の中、対面の研究会開催ができず、予定していた現地調査を中止するなど、研究計画の変更を余儀なくされたが、下記の通り計4回の研究会をオンラインで開催し、学際的議論を深めることができた。

第1回研究会 2020年10月22日

報告1：岡田雅志（防衛大学校）「近世～近代のシナモン栽培・流通における高知地方の位置づけに関する予備的考察」

報告2：杉野好美（京都大学）「インドネシアの現代社会における伝統薬ジャムウの役割——中部ジャワ州村落における行商婦人の事例——」

第2回研究会 2020年12月1日

報告：柳澤雅之（京都大学）「享保・元文諸国産物にみる当帰・萱草・とうがらしの分布」

第3回研究会 2021年1月19日

報告：遠藤正之（上智大学）「17世紀のカンボジアにおける交易産品と交易勢力」

第4回研究会 2021年2月26日

報告1：岡田雅志（防衛大学校）「近世ベトナムにおける本草・博物学の展開——近世日本との比較の視点から」

報告2：小田なら（日本学術振興会特別研究員PD）「資料紹介 仏領期・南北分断期ベトナムの薬用植物図鑑にみるシナモン」

報告3：辻大和（横浜国立大学）「江戸時代の諸国産物帳にみる薬用人蔘（オタネニンジン）の分布」

報告4：柳澤雅之（京都大学）「江戸時代の諸国産物帳にみる生薬の分布の変遷——当帰・萱草の事例」

本年度世界を覆ったコロナ・ショックは、本課題のキーワードとなる健康・医療とグローバルなヒト・モノ・情報の流れとの関係をあらためて考えさせることとなった。グローバル化が進展する21世紀において突如起こった国際移動の制限は、16世紀の近世グローバル化のある種の反動として、東シナ海域で始まった政府によるヒト・モノの移動制限（日本で鎖国と呼ばれてきた状況）を思い起こさせる。また、そうした時代にあっても、人々の健康に必要な薬用植物資源は海を越えて大量に取り引きされ、医薬に関する最新の情報は書籍を通じて東アジアの人々に共有される場所となった。ちょうど、現在、新型コロナ・ウィルスに関する情報がインターネットを通じて世界中の人々の間で共有されるように。

上記の第4回研究会の報告内容をまとめた本書は、このような歴史上における薬用植物資源の流通と情報をめぐる諸側面を明らかにしようとするものである。具体的には主に2つのトピックから構成される。1つ目は、ベトナムの薬用植物の資源情報がいかに記録されてきたかという問題である。ベトナムは、中国伝統医学を基礎とする東アジアの医薬文化を共有すると同時に、その薬材（生薬）を多く産出し、他地域に供給してきた。第1章（岡田論文）は、そのような薬用植物資源の供給地としての性格が近世に書かれた本草書・博物書の記述にどのような影響を与えたかを、資源消費地であった日本と比較しながら考察する。続く、第2章（小田論文）は、植物図鑑という近代科学のフォーマットの中で薬用植物資源の情報がどのように記録されたのかをシナモンを事例に説明する。2つ目のトピックは、海を渡り日本に齎された薬用植物資源情報が栽培という形で広がっていく、いわゆる薬種国産化過程を、江戸時代に編纂された『諸国産物帳』から明らかにしようというものである。第3章（辻論文）は、『諸国産物帳』の記述を手がかりに、これまで断片的にしか知られてこなかった仙台藩・土佐藩の人蔘栽培の歴史を明らかにする。第4章（柳澤論文）は、情報学の手法を用いた外来薬用植物資源の国産化過程の解明に向けて、『諸国産物帳』中の薬用植物に関するデータベース構築の取り組みを紹介する。

本書のディスカッションペーパーとしての性格上、執筆者の間で用語法や見解に相違があっても統一はしていない。また、本書は、科学研究費補助金（若手研究、課題番号19K13366）研究課題名「近世から現代までの東南アジア山地民の移動が国家にもたらした影響に関する研究」（代表：岡田雅志、2019～21年度）の助成を受けた研究成果の一部でもあることを申し添える。

最後に、上記研究会で貴重な報告を行ってくださった方々、また、同じく研究会に参加し、議論を大きく前に進めてくれた石橋弘之氏、高志緑氏、木土博成氏、そして、コロナ禍にあっても、共同研究及び本書刊行を力強くサポートしてくださった東南アジア地域研究研究所 CIRAS センター事務局の皆様に厚く感謝を申し上げたい。

2021年3月

岡田雅志・柳澤雅之